

連載

「ギャンブル依存症」とは何なのか その9

認定NPO法人ワンデーポイント 理事兼施設長 中村 努



【中村 努・認定NPO法人ワンデーポイント理事兼施設長のプロフィール】
1967年東京都生まれ。国学院大学文学部文学科卒。2000年4月、ギャンブルにのめり込んだ自らの経験をもとに神奈川県横浜市にワンデーポイントを設立。現在、理事兼施設長。

【前回までのあらすじ】中村氏がパチンコを始めたのは両親が離婚した高校時代から。大学を出て私立高校の非常勤講師で1年半働いたが、ギャンブルのツケで退職。ギャンブルをやめようと誓ったがまたもハマる状況を繰り返す。ワラにもすがる気持ちで（ギャンブル依存症の施設がないので）アルコール依存症の施設に通い、その経験から全国唯一の回復施設「ワンデーポイント」を開設。わがままな入所者Aさんと過剰に世話するお母さんに出会い発達障害を知る。

「依存症は病気です」という言い方をやめた

発達障害の概念を知ること、ワンデーポイントの考え方は大きく変わった。ギャンブルにハマる背景には個別な背景があることがわかってきたからだ。

発達障害だけでなく、ギャン

ブルにハマっている人には、精神疾患があつたり、能力以上のことを要求されていたりと、様々な背景があつた。

こうした背景に目を向けると、問題解決のためには、その人がどうしてギャンブルにハマっているのかを、個別に見ることが重要だと考えるようになった。一言で「依存症」と括れる問題ではないことは明らかだった。

社会に対しても、画一的な理解を避けてもらうために「依存症は病気です」という言い方をやめた。

一律のプログラムから個別のプログラムへ

ワンデーポイントのやり方を無理やりその人に合わせるのではなく、その人がギャンブルのとりわれから解放され、その人らしく生きることを一緒に考えて私たちが仕事だと考えるようになった。

ある人にはミーティングを

中心に従来の依存症の回復プログラムを提供し、Aさんのようなタイプには、個別なかわりを中心援助した。障害者手帳の申請や年金申請、障害者雇用での就労支援など、私の仕事は幅広くなつた。自身のギャンブルに関係する経験を使うことは、少なくなつた。

自分の経験が役に立たないことが多いと知ったときは、はじめはショックだった。しかし、個別的な関わりの中で、相手の世界を想像し、一緒に悩み、ときに迷い、ときに笑うことで、この仕事に新たなやりがいを見出した。

AさんとAさんのお母さんを厄介な人と感じたことは私の誤りであつたわけであり、ワンデーポイントに来るとどんな人に対しても、自分の価値観や経験だけで考えるてはならないことをしっかりと胸に留めながら仕事をするようになった。

リカバリーサポート・ネットワークの新聞記事がきっかけで利用したSさん

全日本遊技事業協同組合連合会の議論から、依存に関する電話相談を主な事業とするリカバリー

サポート・ネットワーク（以後RSN）が設立されたのは、ワンデーポイントの考え方が転換期を迎えていた2006年だった。

2007年にRSNの活動が新聞記事になった。Sさんのご両親はその記事を目に留め、RSNに電話し、ワンデーポイントを紹介されたそうである。

Sさん(35歳)は、窃盗未遂で警察署に留置されていた。事件の顛末は、Sさんがパチンコでお金を使い果たし、小学生の女の子の財布を盗ろうとして、現行犯で逮捕されたということであつた。

私は、家族の依頼を受け警察署でSさんと面会をした。Sさんは、「パチンコをやめたい、申し訳ない」と、ひたすら私にも頭を下げた。Sさんはこれまでにも軽微な犯罪で2回逮捕されているが、その罪状や経歴とはかけ離れた優しい眼差しをしていた。

面会を終えた後に、ご家族をお願いし、義務教育課程の通知表を見せてもらった。ほとんどが「がんばりましょう」に○がついていて。

Sさんは執行猶予の判決を受け、ワンデーポイントに入所した。非常に混乱していて、精神的にもよい状態ではなかった。大勢の中

でパニックになってしまうことがあつた。私は、すぐにSさんを精神科クリニックに連れて行き、心理検査をお願いした。知能検査を受けたところ、軽度の知的障害があることがわかった。

私は、混乱しているSさんは集団に無理に適応させるとAさんのようになってしまう可能性があると考え、ワンデーポイントでの支援は短期で終え、家族の元で福祉的な支援を受けさせた方がいいと考えた。

そのために、短期間のうちにSさんと何度もクリニックに足を運び、実家の近くの障害者支援機関にも一緒に行つた。その間、Sさんといろいろな話が出来た。

Sさんがこれまで、障害を理解されず、無理を強いられ、努力不足だと言われ続けていることを知つた。学校の通知表の「がんばりましょう」という評価に○がつけられていたが、Sさんは、人一倍頑張っていたに違いなかった。

努力してもうまくできないストレスから解放されるために、パチンコが必要だったのだ。

Sさんは、ワンデーポイントの利用を1ヶ月で終えた。ワンデーポイントを離れたとき、スタッフと利用者に対し「今までこんなに親切にしてもらったことはなかった」と言ってくれた。

Sさんは、その後、療育手帳を取得し、障害がある人が働く特例子会社に就職し、今も安定した生活を送っている。

(つづく)